# 三島由紀夫短篇全集 2

## 夜の仕度

# 目次

夜の仕度 7
春子 29
サーカス 63
家族合せ 70
殉教 89
宝石売買 102
頭文字 125

山羊の首　141
獅子　150
幸福という病気の療法　193
大臣　208
毒薬の社会的効用について　220
あとがき　231

装幀　横山明

依岡昭三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl

# 夜の仕度

三島由紀夫短篇全集2

# 夜の仕度

七に二を足してまともに九という答が出るようなことは却ってこんな時代の他にはあるまいと思われる簡単明瞭な一時期のなかに夏が既に訪れていた。それはどのみち戦争の最後の夏となる筈だった。それだけにそれは春のあとに来て秋に先立つあの夏ではなく、孤立した無縁の、いわば離れ小島のような季節であった。季節が離れ小島なら、頼子たち桂一家のいる高原のその町も、時たま鳴る警報に空を仰ぐ人とてない離れ小島めいた土地なのだった。独逸が降服すると、その町には俄かに独逸人の姿がふえた。集団疎開という名目で、彼等は各地から移住を命ぜられて、体よくこの土地に押しこめられたのである。

六月上旬の一日、芝はK駅で汽車を下りた。彼はその町に子供のころ来たことがあるだけだった。

出迎えの人たちの間に頼子の顔が見えなかったので、彼は改札口を出ると、来馴れた旅行者を装ってわき目もふらずに足早になった。やがて自分の斜めうしろを、同じ速度で、誰かが自転車を押して来る気配に気づいた。きっと頼子だ。言葉をかける勇気がなくて、芝が気づいてくれるのを待っているのに相違ない。

この時芝は、得体のしれない幸福で身がほてるほどだった。こんなに頼子という存在が活々と感じられたことはなかった。目で見るよりももっと鮮やかに、芝は背後の頼子を見ていると感じた。

しかし奇妙に確実なこの幸福の瞬間を少しでも長く味わっていたいと思うと、迷信じみた気持が芝にもう振向くことをさせなかった。歩幅をせばめることも、まして立止ることもさせなかった。

目の前をしらん顔をして歩いてゆく芝を見る頼子の目付は、大人びた目付にかわっていた。芝に言葉をかけまいと思ったのは羞かしさからであったのが、その期間をすぎると、いくらか意地わるな期待からに他な

らなくなって来た。——彼女は芝が自分に気づいた瞬間を知っていた。それでもなお振向かない彼に対して、無理にも彼の見える処へ歩み寄ろうとする気の逸りが失われると同時に、思いがけない気の強さが頭をもたげた。道を左に折れるところで芝はまっすぐに行ってしまおうとした。

「あら左ですわ」

頼子が思わず声を立てた。

その言葉を言い了るか了らぬかに、振向いてよいという合図を与えられたかのように、芝は立止って静かな笑顔を向けた。

それがおのずと今まで芝の気づいていたことを白状させた。少しも愕きの色がない、よく出来る生徒が名を指された時のような、安心しきった笑顔を向けたからであった。

頼子にはしかし、芝の笑顔を形づくった得体のしれない幸福の意味はわからなかった。芝がその幸福を感じることによって、頼子に与えるべき幸福を忘れていたとは、尚更思い付かなかった。——彼女は愕かない芝を愕かすことばかり考えた。まだ挨拶もしないで、「さっきからそっとお後をつけて来たのよ。びっくりなさった？」

芝は心もち歪んだ微笑でこの無邪気な言訳に応えた。彼女がうそをついている。強がりを言っていると思われた。振向かずにいた間に頼子の上に起った変化を彼は知る由もないからだった。——これからの四日間。ふと彼にその四日間が重荷に感じられだした。昨日までの彼であったら、四日間の荷が重ければ重いほど持ち甲斐のあるものと思っただろうに。

大学から労働奉仕に行っている飛行機工場で、芝は辛うじて、丸二月ぶりに頼子と逢うためのその四日間のずる休みを入手したのだ。彼が友人である頼子の兄の隊へ母や彼女や妹が面会にゆく小旅行へ誘われたのを糸口にたびたび頼子を訪ねるようになってから、二人とも一ト月余りを何も言い出しえないですごしたのち、三月下旬には、芝は工場へ住み込み、頼子は高原へ疎開して、離れ離れになったのだが、それ以後二人を恋人めいたものに仕立てたのは、ただ手紙の力があるばかりだった。

桂家の人たちは、女ばかりの家族が男の客を迎えるあの油断のない賑やかさで芝を迎え入れた。

頼子の手紙で事情はおぼろげに芝も知っていたが、夫婦養子である頼子の父母がここ五、六年は別居に馴れ、父一人東京の家に残って、祖父からうけついだ信託会社の仕事で空襲中も東京を離れにくいとはいえ、一度もこの、養母や妻子の疎開先を訪ねて来ないというだけに、ここの家族には、そういう事情を隠した家庭にありがちなやや空々しい朗らかさが備わっているように思われた。

ふつうの平凡な家庭の夜と巧みに似通わせた夕食後の数時間に、却って芝にはその空気がまざまざと読みとれた。寝るまで食卓を離れないのが家族の習慣らしかった。小さい緑色の椅子で妹の和子はきつすぎる靴下留を片手でゆるめながらだまって夢中になって本を読んでいた。祖母は飽きもせずにトランプの一人占いを繰り返していた。時々芝たちの会話を耳にとめて微笑がうかぶと、その微笑が消えないうちに穏やかに顔をあげてみせるのだった。

母の桂夫人が芝にする話や質問は、どこか一々頼子としめし合わせているようなところがあった。頼子が母に任せ切っているようだった。彼女は芝の斜めうしろに籐の安楽椅子に腰かけて、(この位置は自転車のそれを思い出させた)、さえざえと目をみひらいて母と芝とを見比べていた。蝶が羽根を合わせるように、時折深い睫のなかで目をとざした。そうしながら彼女は何かを確かめ何かを量る風だった。――これらが夫人と頼子を並外れた親密な母子と見せた。疲れたようなみちたりた信頼だと芝にもみえた。しかしその親密な愛情があまりに愛情らしくみえるのが曲者だ。愛し合うことにあまりにも臆病な母子がこんな風にしてみせて自ら慰めているのではないかと邪推される程であった。少くとも東京にいる時分の夫人と娘はこれほど親しげに見えなかった。

夫人は次々と芝に空襲や工場や五月末の大空襲後の東京について話させては、彼が話し出すと、すぐさま頼子にその話を手渡してやる。夫人の物馴れた合槌は、身を入れて聞いていない証拠であった。芝は、夫人の目のふちに、枯れかけた白い木蓮の美しさがあると思った。頼子はと言えば、しみじみと気楽な気持で

芝の話に耳を傾けているらしかった。そんな様子は決して十九の少女にふさわしいものではなかった。が、頼子自身はこうして日常生活のなかに落ちついて眺めた芝から、先刻しらぬふりをして歩いて行ったあの芝よりも、数等新鮮な目のさめるようなものを感じて身動きもできなかったのだ。

芝はこんな空気を乱暴にこわしてしまいたくなった。と、それが向うから壊れだした。

「芝さんはとうとう赤紙が来ませんの？」

夫人が何の気なしにこう訊ねた。

「来たんです、でも即日帰郷で、隊に二、三時間いただけでした」

「まあ、どうしてなの？」

「胸膜炎なんだそうですよ」

それは軍隊用語で肺尖カタルのことだった。その時彼がうけた打撃と、それ以後彼を支配している慎重さと投げやりのまじった生活態度と、ましてや、その打撃が頼子に対する欲求を決定的にしたことを、感づかれたくない芝は、磊落な調子でそう答えた。

頼子がそれをきくとかすかに蒼ざめた。祖母や母の前でこうまで芝がざっくばらんに白状してしまおうとは思わなかった。もとより頼子の不満は理不尽なものだった。この白状が以後二人の間柄に外部からの困難を増すだろうという惧れとは別に、彼女はただ、芝と二人の秘密と思っていたその秘密を芝が相談もなしに売ってしまったことが腹立たしかったのだ。

祖母がトランプの手を休めて聴耳を立てた。ふと頼子は今の自分の立場が芝を相手どっていると思うのはまちがいで、自分を除いた桂家の人たちを向うにまわしているのだと気がついた。すると芝への不満が母の上に落ちた。

母を黙らせ、そういう質問の軽率さをさとらせねばならなかった。

「でも軍隊の診断はあてにならないわ。牧野先生に見ていただいたらきっと誤診だと仰言ることよ。それにあの先生は、痩形の体は長命のしるしだと言っておほめになるのよ。お母さまもおほめられになったの」

急に話しかけられて芝は不審そうに頼子を見上げた。

この町へ来てから重い風邪に罹っても牧野博士にだ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl

けは頑なに体を触れさせない頼子が何故こんなことを言い出したのか。ともあれ夫人は直感した。『その話はお止めなさい』という信号に相違なかった。思いがけない娘の辱しめに彼女の顳顬は痛むのだった。

――二十二年まえ夫人が桂家の人になると同時に日本を去ってソヴィエトとナチスの戦争がはじまる直前帰朝するまで主に伯林で医学の研究をつづけて来た博士の、その突然のそして二十年に及ぶ外遊と、桂夫人の結婚との間に、因果関係があることは夫人自らよく承知しているところであった。二十年の無音、帰朝後もなおつづいた無音は、それを忘れぬ人にとってはつまりはたえざる音信だ。

後年良人との不和が別居にまで進んだというそのことが、夫人と博士の間に旧交をよみがえらすのを妨げたのだった。もはや夫人は良人から何物をも、自由をも、享けたくなかった。この矜りがまた、離婚の決心をも妨げているのであった。こうまで夫人が身を持することの固いのは、不真面目な交遊に堪えない鋭い愛情が忽ち真面目な真剣な愛へ陥りやすいのを抑えるためか？　実はそのいつも真剣な顔をしているとみえる愛情が危険を防いでいてくれるのだ。生れながらに夫人は貞淑の運命を持ったのだ。殆ど淫蕩なほど激しい貞淑の。

それが外にあらわれては、感情のない女のように振舞う貞淑さの習慣となった。逆りやすい真剣な愛をいたわるためのこの不真面目な習慣は、真の不真面目に対してさえ盲目だった。真の不真面目こそ今や夫人が怖れねばならぬ唯一のものだった筈ではないか。

三月十日の空襲で病院が焼けたのをよいしおに博士が前から大部分の荷物を疎開しておいた高原の別荘に移って間もなく、桂家の人たちもこの地へ疎開して来たのであった。昔の博士を知っている久松夫人が帰朝後はじめて博士と桂夫人を自分の別荘で引き合わせた。このめぐりあわせの不可思議はさすがに桂夫人の心をも動かしたようだった。それから夫人はたびたび博士の家を、それも普通の訪問時間――午前か午すぎの一、二時間に訪れるようになった。

少女の皮膚はしじゅう傷つきたがっている。頼子が母を苦しげに見るようになった。博士のところから母がかえってくるとしばらく口をきかなかった。病気の

折も博士の診察を拒みつづけた。夫人は娘のなかにも自分と同じ一途な女が、しかも自分のように身を護る術はしらずに住んでいるのを知って戦慄した。

その戦慄からのがれようために桂夫人は、いつも少し早すぎる速度で頼子と察し合い直感し合うお互の鋭敏な作用を逆用して、早すぎる直感のあとにできるわずかな暇で以て、今度はその直感にこだわるまいと力める余裕をもつのであった。この余裕あるがために万事がつまずかずに行くのだと信じ切ること、それはとりもなおさず夫人が母の役目を逃げ出していることだった。

——今も頼子の信号をすばやく察しると、

「そうね、そういえば牧野先生も痩せていらっしゃることね、都合のいい学説ね」

落ちかかったヘアピンを片手で押えながら無感動に言った。

「牧野先生ってお幾つぐらいなのかしら」

頼子は突然はしたないほど晴れやかな声だった。

いつにない娘の大胆な執拗さと、平手打のように来た若々しい声が夫人をうろたえさせた。

傍らで芝はこの二人がいつまで牧野博士の話をしているのかと不思議に思った。一見母と娘は傍らの芝を忘れるほど、二人にとって親しい話題に熱中しているようでもあった。が、仔細に聞くと頼子は何かを主張し夫人はそれをそばから打消す調子にきこえる。共鳴しているのが恰かも言い争っているかにきこえる。先程芝が見た並外れた親密さが、こう考えると別のものに思えて来る。……

「やっぱりだめだめ、戦争は今年中には終らないね」

——眼鏡を外して体を軽く絃を張ったように反らして祖母が言った。利巧な老人らしい時を得た独り言だった。それをきくと和子が急に本を伏せて立上って向う側から祖母のトランプをのぞき込んだ。

「来年？　お兄様おかえりになるの来年？」

幼ないものの一言がそこにいる皆に道徳的な後めたさを呼びおこした。大人たちは今頃軍隊でいじめられている彼のことをすっかり忘れていたのではないか。この場合彼は、皆の前にあらわれた、そして皆が無意識裡にその出現を待っていた、滑稽なほど真面目な或るもの、しばらくの間否応なしに頭を下げさせてくれ

る或る快い脅威そのものであった。
そんなことは知らない和子は金魚のように小さなあくびをしながら戸口の方へ歩いて行った。
「どこへ行くの？」
「もう寝るの」
ふと大人たちも亦『眠たさ』に目覚めた。整理のつかない各々の気持のために、この眠たさは恰好な口実であったからだ。

その明る日、頼子はお勤めを休んだ。徴用のがれの勤先は丘の上にある元Mホテルの外務省分室で、昼休みには自転車で家へかえって昼食をとるのが日課である。

一晩眠ると芝は頼子を見る目が昨日とまるでかわってしまったと感じた。工場の寮で彼をあおり立てていた肉体的な考が、昨日は影も形もなかったのに、今朝は目の前に追っても追ってもまつわる蛾のようにちらついた。しかし工場にいて覚えた肉体的な力は静かな思慮など押し流してしまうように思われたが、今は却って彼を常よりも冷静で精密な人間にするらしいのも、一面彼が冷静さの限界まで、その崖っぷちまで追いつめられている証拠ではなかろうか。彼の頭は、朝にも拘わらず、夜中のように澄んで犀利だった。
朝食がすむとすぐ彼は頼子に合図した。
軽い雨がふったり止んだりしていた。
芝がレインコートをあわただしく着はじめる様子を見て、夫人はそれを見て見ぬふりをすることが明らかに不自然だと気がついた。見て見ぬふりをすることは、頼子と芝に重荷を託けることに他ならなかった。
「この雨の中を散歩にいらっしゃるの」
芝はレインコートの襟を合わせながら、思わず、度外れに狎れ狎れしい微笑で夫人の顔を見た。ところが夫人の微笑は親しいけれど端正だった。ただ物静かに、『手続だけはお踏みなさい』と注意している微笑だった。彼は自分の笑い方の卑しさを恥じて赤くなった。
「ええ、霧が珍らしいので、一度朝のうちに散歩したいと思っていたんです」
「そう……、お風邪お召しにならないようにね。貴下を病気にしておかえししたら、お母様にお叱りを蒙っ

てしまうわ」

頬を赤らめた芝を見ていると、夫人は無責任にも、娘を委ねえた安心としか思えない安心に陥るばかりだった。それも尤もだ。こういう問いかけによって、彼女は二人から重荷を除いてやったつもりで、実は自分の重荷を外したのであったから。

――雨はいつの間にか止んでいた。塀の外で待っていると、頼子がレインコートの釦もはめずに門を駈け抜けて来た。その取乱した姿が芝を得意にさせた。羞恥の仮面でもある得意さだ。

二人は黙って、何かの義務へ急ぐように足早だった。

絶対に人の来ない処という芝の注文どおりに、頼子は母や妹と春以来しばしば摘草にゆく『裏山』(名のない山か、土地の者もそう呼んでいた)を選んだ。雨期の高原の道は湿った繻子のようであった。霧がみるみる濃くなった。頼子は歩きながら二三度咳をした。その可愛らしい咳が、なぜか芝に、疼くような欲情を起させた。

耳もとを流れる霧の音はふと焔の音のように聞えるので、頼子は頬がほてるのはそのせいではないかとぼんやり考えながら、私はこんなに冷静だ、芝さんが何かしようとなさったらたしなめて上げることもできる、と今更確かめてみるのだが、芝の上に起った一夜の変化が頼子にも感応を及ぼしたのか、今朝は芝が少しも怖くなかった。

「ここからお登りになるのよ」――立止って頼子が言った。芝は目の前のかなりけわしい勾配をながめた。そこを登ることは霧に逆らって霧の奥へ入ってゆくことだった。勾配一面に羊歯がしらじらと霧に靡いていた。

そこへ登ってどうしようというのか芝は少しも考えていなかった。ただそこを登ってゆくことが切実に必要だと思われるだけだった。こうして彼が殆ど道のない斜面を登りだすと、頼子には別種の怖さが生れた。芝から離れて一人でかえるのが怖くなった。彼女も亦芝のあとからその危なっかしい斜面を登りだした。

霧に包まれた勾配の歩きにくさは、二人の心がともすると保とうとする均衡を破るにはうってつけであった。恋しはじめた同士は、普通の人よりも一層敏感に

心の均衡を保とうとして、それを保ちえた瞬間に今度は苦しみはじめるのだが、芝と頼子にもそういう時期の痕跡がまだ残りすぎていたからだ。

切り倒された白樺が朽ちたままになっているあたりで、芝は腰を下ろす場所を周囲に探した。その朽木に腰かけては、固い御行儀を強いられて、身動きもできなくなりそうだ。と言って草は万遍なく濡れていた。霧が流れるばかりで、生きているものの気配はどこにもなかった。

芝はレインコートを脱ぎ草の上にひろげた。先に坐ってみせて、

「坐らない？」と頼子に言った。彼が愕いたのは、放心したようにレインコートの裏地を見つめて立っていた頼子が、急に足でも折ったかと思われる烈しい投げやりな坐り方をしたことだった。

霧は二人の周囲を、やや遠くから囲んでひしめいていた。そのうち霧のなかに明るみが射す。また霧のなかが翳ってくる。——二人は他人行儀に坐っていた。お互の存在を忘れたような平静さに満足していた。お互の存在を忘れていること、それはやがて二人が一つのものであると感じることでもあったろうに。しかし時折、肩や肱が苛立たしく触れ合うと、廻転している二つの独楽がふと触れ合って乱れるように、今にも倒れかかろうとしているものをお互の中に読みとった。今まで心棒一本で立っていたと知る恐ろしさである。

こうした不安定な時の移りが芝を異様に疲らせた。この焦躁に似た奇妙な疲れは何であろうか。射られた鹿が霞んでゆく目で、自分の体から流れ遠のいてゆく夥しい血を安らかに眺めるように、彼は自分の熱情のゆくえを他人事のように見送っているではないか。その熱情が芝をはなれて頼子のなかへ流れ入る。少しずつ頼子のなかへ移植される。あの殺風景な、生命の危険が沢山ありすぎていつかそれに退屈してしまうあの飛行機工場で彼が養い育ててきた熱情は、あそこで作られる飛行機同様、空を飛べない代物であったのか。恋が同じ強さで競いもえる火であれば、低い方へ流れてやまない水は恋ではあるまい。

ともあれ恋であろうとなかろうと、今の芝が知った事ではなかった。頼子の中に燃え立つにつれて芝の中に衰えてゆくものを、これ以上ほっておけば取返しが

つかぬ。昨日うしろから来る頼子に気づかぬふりをして歩いてゆく芝を見て彼女に突然生れた気強さよりも一層猛々しい気強さを、頼子は意識してしまうであろう。思えば何か前兆めいていた昨日の再会の失敗が、もう一度繰り返されたらおしまいだ。——

「何だか寒くなった……帰りましょう」

唐突な白けた調子でこう言いざま無造作に立上る芝を、頼子は置去りにされた子供のような眼付で見上げた。その目に見入るのが恥かしいほど、稚ない虚しさを湛えた眼付であった。夕映のように、その刹那の美しさが芝の内部を隅々まで染めた。彼は罪を感じるのだった。

丹念にズボンの泥を払いながら芝が愚図々々しているので、土に敷かれたままの彼のレインコートを畳もうと頼子がまた身を屈めかかると、芝は素速く彼女の前に立ちふさがった。一瞬、二人の体が荒々しくぶつかり合った。

その時彼女が叫び声を立てたかどうか、二人ながら知る由もなかった。ゴワゴワしたレインコートの上から抱きすくめた頼子の体は、手に負えない嵩張ったものに思われた。羽搏いて逃げようとして体中の力で地を蹴っている大きな鳥を、翼の上から抱き押えているようだった。春の豊かな畑土に身を伏せるように、彼女の乳房のなかへ自分の胸が柔らかくはてしなくめり込んでゆくのを感じた。

芝は綿密にその唇に唇を押しつけた。

しばらくして自分よりはるかに烈しい頼子の動悸を、彼はまずふしぎな不安と嫉ましさを以て感じている自分に気づいた。頼子にとって最初のものである接吻が、芝にとって最初のものではないからとて、彼が頼子を非難する理由になろうか。とまれ芝によみがえった最初の鮮明な不快は、彼の掌に彼女の霧に濡れたレインコートが伝えている蛙のような気味のわるい冷たさだった。

——二人が家にかえると、桂夫人は牧野博士を訪ねたらしく、留守であった。

その一日、頼子と二人だけになる機会が来る毎に、芝は知っているかぎりの不都合な笑い話をしてきかせた。そういう時、物怖じした表情を却って典雅にみせ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongl